

## 中東ジェンダー研究の挑戦

——ジェンダー化されたオリエンタリズムを超えて——

鳥山純子

本稿では、「第三世界フェミニズム」に分類されることも多い、中東のジェンダー研究の1970年代以降の発展と変遷、そしてその時々々の課題を整理する。その目的は、しばしば他者化の対象とされる異文化の女性を、同時代に生きる共在者として捉え考えるための道、すなわち、「ジェンダー化されたオリエンタリズム」と戦う方法の探求である。中東という、西欧世界に比べ、何重にも多く他者化されてきた経験からの知見は、中東地域に限らず、私たちの現在の日常を考える上でも多くの示唆に富むであろう。

キーワード：中東ジェンダー研究、第三世界フェミニズム、ジェンダー化されたオリエンタリズム

### はじめに

2013年、人類学者のライラ・アブー＝ルゴド (L. Abu-Lughod) は、『ムスリム女性に救援は必要か (Do Muslim Women Need Saving?)』と題する単著を刊行した。アブー＝ルゴドは、エジプトでのフィールドワークを通じ、暮らしの論理から描き出す詳細な民族誌によって高く評価されてきた。また、文化人類学理論を対象とした鋭い分析でも知られている。そうしたこれまでの学術性や専門性の高い著作に対し、この新刊書でなされたのは、一般読者に向けたアブー＝ルゴド自身が生きる欧米社会の批判であった。彼女がそこで繰り返し言及したのが、「ムスリム女性の救援」を求める言説内部に存在する、中東やムスリムに向けられるジェンダー化されたオリエンタリズム<sup>1)</sup>というまなざしである。このまなざしは、中東やイスラームを、女性抑圧がはびこる独自の環境だと捉える点で、イスラモフォビアの主要なロジックと共通する。すなわち、同情的であれ敵対的であれ、ムスリム女性を他者として偏った認識のもとに捉える点では共通し、このまなざしはひとたびバランスが崩れれば、人々を他者排除に駆り立てる道具となりうるというのである (Abu-Lughod 2013)。

それに抗う上で必要なものは何か。アブー＝ルゴドによれば、それは、「他者」として表象されるステレオタイプとは距離を置き、私たちと同じ地平にムスリム女性たちを捉えること、また彼女たち一人ひとりが生きる個別の文脈の独自性や多層性を無視せず、複雑なままに現実を理解する努力を怠らないことであり、そこで重要なのは「目で見て耳で聞くこと」だという (ibid: 224)。またそれを広い歴史的、社会的文脈の中で理解することも肝要であるという (ibid: 45)。ただし、その実践は言われるほどに容易ではない。複雑さをそぎ落とすことなく「目で見て耳で聞く」とは具体的にはどのようなことなのか。あるいは、それにはどのような難しさや問題が付随し、それを成し遂げるにはどのような事柄に留意すべきなのか。本稿では、アブー＝ルゴドと関心を共有しながら行われてきた、中東ジェンダー研究で取り組まれてきた課題とその発展の軌跡を検討することから、こうした問いを探求したい。具体的には、女性の声に耳を傾け、女性たちの姿を主体的に立ち上げさせたいという、フェミニストアジェンダに積極的かつ批判的に取り組んだ研究を対象に、中東ジェンダー研究の発展と変遷を改めて回顧する<sup>2)</sup>。そこから、見えてくるものは、しばしば他者化される他地域に生きる女性たちを、同時代に生きる共在者として考える上で重要な示唆となるだろう。

## 中東の女性表象にまつわる課題

先行研究の検討に先立ち、アブー＝ルゴドの指摘が向けられた現代の中東の女性たちが語られる際の問題について確認しておきたい。2017年12月、『文化人類学』に「ムスリム社会における名誉に基づく暴力」という特集が掲載された。この「序」で著者らが試みるのは、女性の暴力を主題化することまつわるオリエンタリズムを明らかにし、それを乗り越えるための方策として具体的な事例検討の重要性を論じることである (田中・嶺崎 2017: 311)。この点において、著者らの議論は前出のアブー＝ルゴドと共通するところが多い。

ところが前半部分の理論的枠組みの議論においては、ジェンダーの問題がオリエンタリズムにおいて強調され異文化の本質化につながるという指摘や、そこに見られる女性の主体性の過大評価といった鋭い考察があったものの、後半、オリエンタリズムを回避した議論としてヴェールの分析が提示されるに至り、いくつかの問題が明らかになる。たとえば、考察対象のぶれ (エジプトの女性たちの事例としながらも、フランスでイスラーム教に改宗した日本人女性研究者の見解が引用される) や、固定的なイスラームの提示 (議論の背景として示されるシャリーアへの言及では時代性への言及がないままに、他の解釈が不可能であるかのように特定の解釈だけが示される) という問題である。また分析そのものが、男性

対女性という構図をもとにした、女性によるヴェール着用の機能主義的考察の形をとり、主たる考察結果として示されるのは、女性に与えられた「構造的」(ローカルな文脈で、という意味合いだと思われる)な暴力からの防御方法としてのヴェール着用の社会的機能である(前掲書:314-21)。

筆者は機能主義的アプローチそのものに問題があるというのではない。ただ前半部において中東に生きる個別の女性たちの声に耳を傾ける必要性が語られ、社会構造に無批判な議論が断罪されているにも関わらず、後半部では歴史性や動態性が抜け落ちた機能主義的分析がなされるという矛盾を指摘したいのである。つまり、後半の議論と結論は、前半において著者らが批判したジェンダー化されたオリエンタリズムそのものだとはいえないだろうか。

この「序」の後半部分での分析に見られる問題を要約すれば、1) 没歴史性、2) 没地域性、3) 分析者による「現地の声」の代弁、4) 権力性についての視座の欠落、とまとめることができよう。これらはこの「序」に限らず、中東の女性を議論する上でしばしばみられる傾向であり、また中東ジェンダー研究において問題化され、その回避が模索されてきた中心的課題でもある。そこで以下では、これらの問題点を中東ジェンダー研究としてどう乗り越えようとしてきたかという点に留意しながら、これまでの取り組みを紹介していくこととしたい。

## 西欧中心主義的価値観への挑戦：1970年代半ば～

田中・嶺崎と同様、中東におけるジェンダー実践を機能主義的に分析した議論は、1970年代半ばから行われてきた。その当時、中東の女性研究における主眼の一つは、西洋近代的な価値観に基づく、偏った「中東の女性」観に異議申し立てをすることだった。それは、中東の女性の在り方を議論すると同時に、西洋近代的な価値観に立脚する、西欧中心主義的女性観に抗う作業でもあった。この流れにおいて、イスラーム教や家父長制を女性抑圧の源泉とする見解には優れた反証が行われてきた。そこで重視されたのは、外在的な基準ではなく、文化の内部の価値観において、物事を解釈する必要性、すなわち文化相対主義に立脚したイスラームや家父長制の読み直しであった(cf. アハメド 2000, Mernissi 1975, エル＝サーダウィ 1988)。

モロッコ出身の社会学者であるメルニーシーは、70年代半ばにイスラーム教嫌悪の潮流に異議を唱え、一見女性抑圧的に見えるイスラーム教の教義が、実は女性蔑視ではなく、女性賛美的価値観のもとに築かれたものだとする解釈の転換を行った(Mernissi 1975)。メルニーシーによるイスラーム教の教義の読み直しの意義は、男性中心的とされるイスラーム教の教義が、女性にとっても魅力的な

ことを現地の言説を用いて論証したことにある。またイスラーム教の聖典が、女性たちによって読み直され、ときに読み替えられうるものだとする指摘も重要だった。

80年代に入ると、同様の論理をもって、イスラーム教に続いて、「男尊女卑的家父長制家族」という言説も議論の週上に挙げられるようになった。家父長制の検討で行われたのは、女性による家父長制への主体的参入の実態を明らかにすることと、その理由を探ることだった。そこで注目されたのが、家父長制が果たす経済分配システムとしての機能である。トルコの社会学者であるカンディヨティは、男女間の支配構造としてではなく、実際に家族内で行われる権力、物資、資源の移動・分配回路として家父長制を捉えなおす議論を提示した (Kandiyoti 1991b)。カンディヨティはさらに、物質分配の回路であるだけに、家父長制は経済状態や社会状況によって果たされる機能が変化することも指摘した (ibid)。

このように、中東ジェンダー研究（当時は中東女性学と呼ばれていた）の当初の主眼は、女性の行動を規制する女性抑圧的な中東ジェンダー規範を、西洋とは異なる文化的前提のもとに成り立つ独自の論理体系、すなわち文化システムの一部として捉え直すことにあった。イスラームであれ、家父長制であれ、この二つの読み直しで取り組まれたのは、女性の扱われ方についての外在的批判ではなく、女性の立場から、魅力ある文化システムの一部としてジェンダー規範を捉えなおすことだった。

しかしながら、その主眼がまさに文化システムという集合的な現象の機能主義的分析に置かれたために、この取り組みは限定的なものにならざるを得なかった。個々の女性たちの行動や、意図や希求には重要性が見出されなかったのである。その結果、取り残されたのが文化システム内部の格差や権力性だった。

## 新たな取り組みで問題化された集団内部の格差や権力性の考察

文化システムという枠組みを超え、内部の差異を考察するにはどのような方法が可能なのか。この課題にいち早く取り組み、その後の議論を先導した一人が、本稿冒頭で紹介したアブー＝ルゴドである。アブー＝ルゴドは、文化という概念に備わる一般化の働きを問題化し、それを乗り越える記述の必要性を訴えた (Abu-Lughod 1993: 12, 13)。アブー＝ルゴドによれば、文化という概念を用いて人々の生の在り様を描写する行為は、本質主義的な「他者」創出をうながし、「他者」を下位に位置づけることにつながりうる営為である (ibid: 12, 13)。アブー＝ルゴドによれば、この序列を解体し、一般化を通じて語られる文化がもつ問題点である、同質性の強調、一貫性の希求と、歴史性の欠如を乗り越えるために

は、次の3点に留意することが肝要であるという。すなわち、第一に、典型創出をめざした一般化を避け、第二に、個々のケースがもつ特殊性、とりわけ個々の事象が起こった実際の文脈、歴史性、関係性（これらは私たちが自らの経験を顧みた時に重要な要素である）に目配りをし、そして最後に、人々の論理の組み立て、説明の仕方、人々の行動についての解釈に目を向けることが必要である (ibid: 14)。その具体的方策として提唱されたのが、特定の個人と、その個人をとりまく特定の関係性に目を向け、それをより大きな出来事と関連づけ記述する「個の民族誌 (ethnography of particular)」の執筆だった (Abu-Lughod 1993: 14)。文化という集合的な単位を離れ、個別具体的な事象を分析対象とする試みは、ジェンダーという形で立ち現れる現象の中核に、内部の格差や権力関係を据えた分析を可能とし、議論の射程を、女性や家族に限らない社会状況全般にまで押し広げる効果を生み出した。

こうした議論の発展には、バトラーらジェンダー研究者による、構造とエージェンシーの関係や、そこに立ち現れる権力性の考察を始めとする、ジェンダー理論の先鋭化が欠かせなかったという (シャクリー 2008)。構築主義的視座に基づくジェンダー学における議論の蓄積は、現地で実践される独自のシステムを根本から否定することなく、個々のイデオロギー実践における権力関係を問うことを可能にした。これにより中東ジェンダー研究者は、自文化中心主義をとるのか、現地の抑圧を否定するのかという、文化相対主義をめぐるジレンマから解放された。さらに権力を構造の問題として捉える枠組みは、現地におけるジェンダーイデオロギーの多様で柔軟な実践の研究発展を大きく後押しした (cf. Abu-Lughod 1998)。

## 女性によるイデオロギー実践の解明：90年代初頭～

ジェンダーイデオロギー実践の解明において脚光を浴びたのが、民族誌的手法である。90年代初頭から2000年代初頭には、エジプト研究の分野でも、庶民街に生きる女性を対象に、長期の参与観察にもとづくミクロな事象を描いた民族誌が数多く発表された (cf. Abu-Lughod 1990, 1993, Ghannam 2004, Hoodfar 1991, Inhorn 1994, MacLeod 1991, 1996, Mahmood 2005, Singerman 1995, Werner 1997, Wikan 1996)。一世代前までの民族誌とは異なり、この時期の民族誌では、女性が直接の考察対象となり、女性の論理から彼女たちの実践が描かれた。言い換えれば、これらの著作では、イスラームや家長長制にもとづくジェンダーイデオロギーではなく、実際の女性の生へと焦点が移動した。つまり、それぞれの状況に応じた社会的制約を経験しながらも、持ちうる限りの物質的、関係的、知的

資本と、性格的特性を活用しながら日々の生活を生き活きと送る女性の生そのものを明らかにすることが試みられたのである。

経済学のバックグラウンドをもちながらカイロの貧困層家庭の暮らしについて記した人類学者のフードファー（H. Hoodfar）は、社会資源にも経済資源にも恵まれない女性たちが、いかに婚姻、労働、消費、生殖を、自らの個人的・集団的利益のために利用していたかを詳述した（Hoodfar 1997）。フードファーによれば、そこに暮らす女性たちは、伝統的価値観すら主体的に流用し、読み替え、一種の資源としてそれらを利用して、近隣コミュニティでの自らの地位の維持・向上に努めていたのである。こうした議論によって、それ以前はイスラーム教や家父長制をもって語られてきたジェンダーイデオロギーすら、女性の主体的な利益追求の資源となっていたことが明らかにされた。

こうした日常生活に関する豊富なディテールの提示は、暮らしの論理に基づいたジェンダー理解へと方向転換を遂げる原動力になったと言える。たとえばこの時期盛んに取り組まれたのが、女性によるヴェール着用の実践や動機の解明だったが、そこでは実際にヴェールを着用する女性の意見や社会に流通する言説の分析をもとに、ヴェール着用に読みこまれてきた、従順／反抗、敬虔／世俗、貞淑／ふしだらといった二項対立的理解が解体され、その実態解明が試みられた。また研究対象も広がり、農村から都市、中産階級から労働者階級、女子学生から中年の既婚女性にいたるまで幅広い対象を扱う民族誌が執筆された。

## 国家における女性の構築過程の究明：90年代初頭～

90年代にはまた、国家を単位としてジェンダーを歴史的に分析する議論も盛んに行われた。中東という地域は、中東、あるいはアラブ、イスラームという概念が地理的集合カテゴリーとして（時に誤用されながら）多用される傾向がある。しかし実際には、政治体、植民地支配以降の歴史、女性のあつかい（women question）といった、現代の女性の在り方を左右する要素においては、同じ中東でも個々の国家・地域で差異がある。こうした認識のもと、90年代に入ると、帝国主義との関わり、経済の変化、国家建設、世俗化といった要素に注目しつつ当時の女性の状況を明らかにする研究が数多く発表された（cf. Abu-Lughod 1998, Badran 1991, Bier 2011, Botman 1999, Hatem 2000, Russell 2004）。そこで発展したのが、国民国家形成や（19世紀末から現在までの）国家の近代化において、女性が果たした役割や国家という枠組みの中での女性たちの振る舞いを分析する研究である（Kandiyoti 1991a）。

こうした国家を単位とした女性研究は、国家の個別の歴史や、独立をめぐる政

治的議論の展開に、ジェンダーへの着目から得られた複数の、ときに重なりときに衝突する「内部」の見解を位置づけた研究として発展した。こうした研究の意義として重要なのは、国家という文脈を意識したことで、特定の社会背景のもとに機能する、特定の社会組織の内部に位置する権力性を描きだすことが可能になったことである。エジプトについて言えば、これまで標準とされてきた特定のジェンダー規範（男女の明確な役割分担、女性を私的空間に振り分ける男女の空間的隔離、家父長制の強い影響）が、建国プロジェクトの中で政治的企図や経済的企図の副産物として、あるいはその中心的論争の対象として「つくられてきた」軌跡を辿る研究が登場した。それにより、植民地期、独立闘争期、社会主義国家創出が目指されたナーセル大統領統治期、あるいは門戸開放政策が推進されたサッダート大統領統治期といったそれぞれの時期において、女性のあるべき姿が社会の関心事として議論され、複数のアクター間で交渉され、時には偶発的な形で現在のような形をとるに至ったことが明らかにされてきた。また女性を対象とした研究ではなく、女性の声から歴史を描いた研究が見られるようになり、多くの女性たちが建国期に重要な役割を担い、社会の主流派の議論に抵抗し、衝突し、あるいは折衝し、先導してきたことが示された。

## 新たな取り組みが直面した課題

90年代には、中東ジェンダー研究とされる論文数も対象とされる事象のバリエーションも急激な増加を遂げた。豊かなディテールが報告されるようになった裏には、女性の主体性の重視や個別の事象を社会的文脈との関わりから議論する構築主義的視座の浸透があったと考えられる。そこで見られた転換は、謂わば、イデオロギーやシステムではなく、特定の人物や団体、政治家といった実態をもつ主語のもとに、具体的な実践としてジェンダーが語られるようになったことであつた。多様な対象による多様な実践の実相が明らかにされることにより、ジェンダーイデオロギーがもつ解釈と実践の広がり意識され、イスラームや家父長制といったジェンダーイデオロギーだけでは特定の行動や特定の規範的言説を説明できないとする理解が定説となつていった。

しかしながら90年代に盛んに行われた多様性の解明は、イデオロギーの解釈や実践の次元に限られていた。多くの論文では、具体的で多彩なデータが扱われていたにも関わらず、結果的に繰り返し用いられたのは、固定的なイデオロギーを多様に実践する個人、という定式化された分析枠組みだった。この枠組みの問題は、創造力に富んだ主体性のある個人が称揚される一方、ジェンダーイデオロギーとされたイスラーム的ジェンダー観や家父長制的傾向が、歴史性や地域性を

奪われ固定化されたところにある。つまり、個人によるイデオロギー解釈や実践の在り方のみ変化や多様性が見出され、それらがイデオロギーそのものの変化として検討されるには至らなかったのである。この傾向は、例えばセクシュアリティによる女性身体の管理の言説や、「保護と従属」といった社会的性別役割の言説に顕著である。どちらも、現地で広く流通するジェンダーの主流言説であり、研究者も長年この前提を共有して具体的な人々の行動の分析を試みてきた。

ただしたとえば女性身体の管理をセクシュアリティによって説明するロジックをとってみれば、そこには、女性をセクシュアリティや性的器官・機能において全体化する特定の女性観が埋め込まれている。当然のことながら、女性の身体を隠蔽することと、セクシュアリティの管理はイコールでつながるものではない(鳥山 2009)。それにも関わらずこのロジックは現在に至るまで多くの議論で無批判に継承されてきた。また、女性の場を家庭に規定する主流言説において自明視されるのは、役割分担の背後にある、「イスラーム教のおしえ」が男性に課す家族の女性成員の扶養義務である。ただしこの場合もまた、そうした規範的言説が存在することと、女性の活動の場を家庭に限定することは同じことを意味するものではない。この二つの偏った論理的前提は、先述した「序」においても見ることができる。

現地の論理の無批判な援用に抗い、格差の実態に迫るためには、現地の言説に見出される偏りの特徴にこそ、研究関心が向けられるべきであろう。現地の言説を実態と混同し、それをを用いて女性の身体管理や女性の社会進出の遅れを説明すれば、トートロジーとなる。そうした行為は、実相理解につながらないばかりか、それを阻む無責任な主流言説の再生産との誹りを免れない。

## 中東ジェンダー研究の勢いの低下、2000年代半ば～

実は、学問領域としての中東ジェンダー研究の勢いは、90年代末にピークを迎えた後、弱体化傾向にある。これは論文数だけでなく、たとえばカイロアメリカン大学大学院での学生の関心にも見られる変化であるという。ただし2000年代、2010年代には、エジプトを例にとっても、女性主導の離婚を可能にする法制化や、国会議員選挙の女性クォータ制の議論、ハラスメント防止法の制定といった、ジェンダー研究の主要トピックとなりうる大きな出来事も起こった時期であり、社会におけるジェンダー問題への関心が失われたとは考えにくい。ではそこで一体何が起きているのだろうか。

この間、エジプトを対象とした研究に限れば、ジェンダーにかわってとりわけ2000年代半ばから盛り上がりを見せてきたのが、「カイロスタディーズ」と呼



ばれる学際的な研究アプローチである。現在この分野を牽引するのは、90年代までジェンダーを中心的テーマとして研究を進めてきた研究者らである。「カイロスタディーズ」の中核は、急激に変化する社会的環境を背景としつつも、個人に焦点を当てた実証的研究である。扱われるトピックは、大規模都市開発、グローバル企業の躍進、近代的な商業空間の出現と多岐にわたる。そこで試みられるのは、消費文化論や空間論、グローバリゼーション論といった理論を用い、カイロやエジプトに留まらない、より広い文脈を対象を据えて、構造的格差に目配りをしながら社会現象を記述することである (cf. Du Koning 2005, Ghannam 2002, Peterson 2011, Singerman and Amar 2006)。また民主化運動が大統領を辞任に追い込んだ2011年以降は、民主化運動や「1月25日革命」、市民空間やメディアスケープを扱った研究も急激に増加した (cf. Abouelnaga 2016, Herrera 2014, Mostafa 2017, Nordenson 2017)。

こうした新たなアプローチに見られる特徴の一つは、中東、エジプト、イスラームといったカテゴリーをあえてもちこまず、消費論、空間論、市民社会論といった理論枠組みのもとに現象が考察されることにある。そこでは、地域や宗教に関わる独自性は前提とされず、グローバルな世界の一現象として具体的な事例分析がされている。

洗練された理論主導の分析は、これまで議論の前提として過剰に特権的な地位が与えられてきたイスラーム言説や中東の家族言説を、社会現象の変数の一つとして相対化することに成功した。しかし同時に、こうした研究では、現地の人々の意識や意味付けが置き去りにされているようにも見える。社会に埋め込まれた格差を、理論的に分析する議論には学ぶものも多いが、中東ジェンダー研究の蓄積に見られたような、調査対象者の声を重視した、地に足のついた分析がされなくなっていることへの危惧は残る。

## イスラーム教の動態的分析とドキュメンテーション重視の女性運動研究、2010年代～

そうしたなか、近年、女性たちの声を重視した分析として優れた研究成果を生み出しているのがイスラーム学の分野である。2010年代に入り、イスラーム学を舞台に、女性に関わるクルアーン解釈の歴史の変遷や、女性によるクルアーンのラディカルな読み替えを扱った研究が現れ、クルアーンが持つ解釈可能性の広がりが見事に示されている (cf. 後藤 2016, Hammer 2012)。こうした研究の意義は、説明要因としてのイスラーム教ではなく、イスラーム教そのものが経験してきた動態性や重層性を明らかにしたことにある。こうしたイスラーム教の動態的分

析が発展した背景には、たとえばアメリカの著名な女性イスラーム説教師アミーナ・ワッダードらが提唱する、フェミニスト的でラディカルなクルアーン解釈がある。興味深いのは、彼女のような存在を支えているのもまたイスラーム教を重視する宗教原理主義的な広がりであるという点である。すなわち、こうした近年の動きにおいては、宗教的関心の高まりは、これまで危惧されてきたような既存の固定的教義を支援する動きではなく、むしろ宗教言説が幅広く解釈される動きを促進させ、それが優れたイスラーム研究を生む土壌となっている、とすることができる。いずれにしても、宗教言説の批判的再読やその批判的分析という循環により、中東ジェンダー研究では、イスラーム教やシャリーア、クルアーンを主語にした一般化された議論はもはや成立しえない環境が整いつつある。

また2011年以降のフェミニズム運動を扱った著作にも新たな傾向が表れている。その新規性を牽引するのもまた、実際の運動自体のアジェンダや活躍の舞台の多様化と複雑化である。チュニジアを研究する鷹木によれば、近年のチュニジアの女性団体の活動では、国連の女性差別撤廃条約が重視され、その国内法への適応では、イスラーム教実践との整合性は問題にすらならない局面が観察できる。こうした動きは、社会に広く支持され、実際の法改正に結びつく大きなうねりとなっているという（鷹木 2016）。こうした動きは単線的なものではなく、大きな政治的動きや、諸勢力の激しい対立の中で偶発的にあらわれた側面を持つ。利害関係を異にする多様な勢力が重層的に絡み合い、先が読めない激動の社会変動をジェンダー視点で考察する方法として、鷹木は出来事のプロセスを記述する「ドキュメンテーション」という手法を提唱する。社会情勢が複雑かつ急激に変化する中東を扱うジェンダー研究において、実相の考察を重視するのであれば、こうした手法の重要性は今後も高まると考えられるだろう。

## おわりに

消費環境であれ、イスラーム解釈であれ、民主化運動後の政治運動であれ、近年中東地域の社会情勢は、ジェンダー的にみても目まぐるしい変化を遂げている。2000年代半ば以降に中東ジェンダー研究が経験した勢いの低下は、こうした社会変化をどこまで実態として捉えられるのか、という点において、疑義を呈されたものと考えられるだろう。

しかし振り返ってみれば、中東のジェンダー研究は、常にその時々時代のアジェンダに向き合う形で理論的緻密さを獲得してきたものだった。70年代には西欧中心主義的なジェンダー理解に抵抗し、90年代には社会内部の権力性を問い、そして現在では、リベラリズムと対置されることもあるイスラーム教そのもの

ののりべらるな実践の実証研究が行われている。そのいずれもが、定型的な理論主導型の研究ではなく、具体的事例を生きる人々の見解に寄り添い、そこに論理的整合性を見出すことで枠組みの刷新にまでつながるような研究成果を出すに至っている。その営為を端的にまとめるならば、目の前の現実と、それが語られる言説、問題にされる文脈、それらを適切に接合し、分析するためのストーリーと手法の探求であり、そこで重視されたのが、固定的な現実理解や固定的な価値観に抗い、人々の独創的な生に歩み寄ることであった。この営為では、植民地支配者、ナショナルエリート、宗教指導者、コミュニティ指導者、家族の中での年長者、夫、兄弟、姑、あるいはピアグループといった、幾重にも重なる見解とそこに内包される権力の層を整理し、多様性をそぎ落とすことなく議論の遡上にあげるための様々な取り組みが試みられてきた。このように捉えれば、中東におけるジェンダー研究は、変わりゆく現実を前にしてその重要性はなお高い。

中東ジェンダー研究は、「第三世界フェミニズム」として取り上げられることがある。しかしそれが意味するところとは、本論で示したように、西欧中心主義的なジェンダー観に異議を唱えるだけのものではない。むしろそれは、非第三世界と比べて何重にも多く、権力性を孕んだ外在的なイメージに晒される、そうした環境で周辺化された人々の個別の声に耳を傾け、その実態を格差という視点から理解するための営為と捉えられるべきである。グローバル化の進展の中、空間的制約を超えて多様な勢力が複雑に絡みあい変化をとげる社会状況において、今後どのような地理的位置においても単純な権力性の想定が困難なことは明らかである。そこでジェンダー研究の在り方を考える時、中東ジェンダー研究が向き合ったジレンマやそれを乗り越えるための方策は、中東地域に限らない他地域のジェンダー研究において、さらには私たちの日常を考える上でも多くの示唆に富むはずである。

(とりやま じゅんこ 立命館大学)

[注]

- 1) Abu-Lughod (2013) が使用した“gendered orientalism”という概念の日本語訳。その意味するところは、多層的に他者化された他者、とりわけそこにジェンダーを用いた階層化が埋め込まれた他者化と理解できる。
- 2) 本稿の着想の一端は、笹川平和財団での共同研究会報告書執筆（鳥山純子、2015年「ジェンダー概念を軸にたどる中東女性研究の軌跡」『イスラームと価値の多様性、——ジェンダーの視点から』笹川平和財団、55-71）とそれについての討論に基づいている。

## [参考文献]

- アハメド, ライラ 2000=1992『イスラームにおける女性とジェンダー——近代論争の歴史的根源』林正雄, 岡真理, 本合陽, 熊谷滋子, 森野和弥訳, 法政大学出版局
- 後藤絵美 2016「イスラーム国家における『シャリーア』と『自由』——エジプトのヴェール裁判にみる政教一致体制」『現代のイスラーム法』アジア法学会編 成文堂, 46-78
- エル＝サーダウィ, ナワル 1988『イヴの隠れた顔——アラブ世界の女たち』村上真弓訳 未來社
- シャクリー, オムネイヤ 2008=1998 宮原麻子訳「教育を受けた母, 構造化された遊び——十九世紀末から二十世紀初頭のエジプトにおける育児」後藤絵美, 竹村和朗, 千代崎未央, 鳥山純子, 宮原麻子訳『女性をつくりかえるという思想——中東におけるフェミニズムと近代性』明石書店, 230-316
- 藤木恵子 2016『チュニジア革命と民主化人類学的プロセス・ドキュメンテーションの試み』明石書店
- 田中雅一・嶺崎寛子 2017「序《特集》ムスリム社会における名誉に基づく暴力」『文化人類学』82, 3, 311-327
- 鳥山純子 2009「中東研究における女性身体の処遇 - 「交渉」を鍵とした研究動向分析」『人間文化創成科学論叢』12, 277-285
- Abouelnaga, S. 2016 *Women in Revolutionary Egypt: Gender and the New Geographics of Identity*. The American University in Cairo Press
- Abu-Lughod, L. 2013 *Do Muslim Women Need Saving?* Harvard University Press
- . 1993 *Writing Women's Worlds: Bedouin Stories*. University of California Press
- . 1990 The Romance of Resistance: Tracing Transformations of Power Through Bedouin Women. *American Ethnologist* 17 (1) : 41-55
- . (ed.) 1998 *Remaking women: Feminism and Modernity in the Middle East*. The American University in Cairo press
- Badran, M. 1991 Competing Agenda: Feminists, Islam and the State in 19th and 20th Century Egypt. In Deniz Kandiyoti (ed.) *Women, Islam and the State*. Temple University Press, pp. 201-236
- Bier, L. 2011 *Revolutionary Womanhood: Feminisms, Modernity, and the State in Nasser's Egypt*. The American University in Cairo Press
- Botman, S. 1999 *Engendering Citizenship in Egypt*. Columbia University Press
- Du Koning, A. 2005 *Global Dreams: Space, Class and Gender in Middle Class Cairo*. Amsterdam University
- Ghannam, F. 2004 Quest for Beauty: Globalization, Identity, and the Production of Gendered Bodies in Low-income Cairo. In Hania Sholkamy and Farha Ghannam (eds.) *Health and Identity in Egypt*. The American University in Cairo, pp.43-64
- . 2002 *Remaking the Modern: Space, Relocation and the Politics of Identity in a Global Cairo*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press
- Hammer, J. 2012 *American Muslim Women, Religious Authority, and Activism: More Than a Prayer*. University of Texas Press
- Hatem, M. 2000 The Pitfalls of Nationalist Discourses on Citizenship in Egypt. In Suad Joseph (ed.) *Gender and Citizenship in the Middle East*. The University of Syracuse Press. pp. 33-57
- Herrera, L. 2014 *Revolution in the Age of Social Media: The Egyptian Popular Insurrection and the Internet*. Verso
- Hoodfar, H. 1991 Return to the Veil: Personal Strategy and Public Participation in Egypt. In

- Nanneke Redclift and M. Thea Sinclair (eds.) *Working Women: International Perspectives on Labour and Gender Ideology*. Routledge, pp.104-124
- Inhorn, M. 1994 *Infertility and Patriarchy: The Cultural Politics of Gender and Family Life in Egypt*. University of Pennsylvania Press, 1995
- Kandiyoti, D. 1991a Introduction. In Deniz Kandiyoti (ed.) *Women, Islam and the State*. Philadelphia: Temple University Press, pp. 1-21
- . 1991b Islam and Patriarchy: A Comparative Perspective. In Nikki R. Keddie and Beth Baron (eds.) *Women in Middle Eastern History: Shifting Boundaries in Sex and Gender*. Yale University Press, pp. 23-42
- MacLeod, E. 1996 Transforming Women's Identity: The Intersection of Household and Workplace in Cairo. In Diane Singerman and Homa Hoodfar (eds.), *Development, Change, and Gender in Cairo: A View from the Household*. Indiana University Press. pp. 27-50
- . 1991. *Accommodating Protest: Working Women, the New Veiling, and Change in Cairo*. The American University in Cairo Press
- Mahmood, S. 2005. *The Politics of Piety: The Islamic Revival and the Feminist Subject*. Princeton University Press
- Mernissi, F. 1975. *Beyond the Veil: Male-Female Dynamics in Modern Muslim Society*. Al Saqi Books. p.41
- Minces, J. 1982. *The House of Obedience: Women in Arab Society*. Zed Books
- Mostafa, D. (ed.) 2017 *Women, Culture, and the January 2011 Egyptian Revolution*. Routledge.
- Nordenson, J. 2017 Online Activism in the Middle East: Political Power and Authoritarian Governments from Egypt to Kuwait. I.B. TAURIS
- Peterson, Mark Allen. 2011. *Connected in Cairo: Growing up Cosmopolitan in the Modern Middle East*. Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press.
- Russell, M. 2004 *Creating the New Egyptian Woman: Consumerism, Education, and National Identity, 1863-1922*. Palgrave Macmillan
- Singerman, D. 1995 *Avenues of Participation: Family, Politics, and Networks in Urban Quarters of Cairo*. The American University in Cairo
- Singerman, D. and Paul Amar (eds.) . 2006 *Cairo Cosmopolitan: Politics, Culture, and Urban Space in the New Globalized Middle East*. The American University in Cairo Press.
- Werner, K. 1997 *Between Westernization and the Veil: Contemporary Lifestyles of Women in Cairo*. Transcript Verlag
- Wikan, U. 1996 *Tomorrow, God Willing: Self-Made Destinies in Cairo*. The University of Chicago Press

## **Challenges of Middle Eastern Gender Studies: Searching for Ways to Go beyond “Gendered Orientalism”**

TORIYAMA Junko

(Ritsumeikan University)

The article critically examines works on the Middle Eastern gender studies to discuss the field’s development, issues, and solutions. Like other women from the Third World, women in the Middle East have often been defined as “the other.” This has become increasingly common in the current political and cultural environment, where Islam has become the single biggest target to blame the world’s misfortunes. How can we approach women from different cultures without denying their faith or cultural values? What are the difficulties involved in the process? With these questions in mind, this article explores the ways of going beyond the problem of “gendered Orientalism,” which exposes women to the layers of different types of power and ultimately deprives them of their voices, and essentializes them merely as a symbol of “the other.”

Keywords: Middle East gender studies, Third World feminism, gendered Orientalism.